



# 家庭を拠点とする児童と 主婦の合唱団

フリーライター  
**伊集院恭子**

生涯学習という考え方には、合唱活動に限っていえば、児童合唱とおかあさんコーラスにもっともふさわしいものではないだろうか。

通常、生涯学習といえば、ともすれば中年以降、老年期の活動と考えられるがちだが、学校という枠組みの外側で、地域や年齢などが異なるさまざまな子どもが主役となる児童合唱は、まさに生涯学習の端緒となる重要な活動のひとつといえる。また、おかあさんコーラスとよばれている、家庭婦人による合唱も、その過程や行く末を考えると、生涯学習の重要な一環といってよい。

ここでは、その両者の現在の活動状況について述べてみたい。

## 発展途上で苦悩する児童合唱

### 〈組織について〉

現在、(社)全日本合唱連盟(理事長 吉村信良)のジュニア部門に加盟している団体は142団体(1999年12月現在)で、全加盟数の約3パーセントにあたる。また、合唱連盟のほかに、全日本少年少女合唱連盟、JjCSなどの組織もあり、児童合唱の世界は、組織的にはまだ混迷状態にあるようだ。

全日本少年少女合唱連盟(理事長 岩崎洋一)には、50から60団体が所属しており、その活動範囲は、東京から西側の合唱団が中心になっている。また、JjCS(理事長 薬師神武夫)には約30団体が所属し、活動範囲は北海道から大阪までと、どちらかといえば東日本が中心になっている。

これらの組織への加盟状況は、相互に重複している場合がかなりあるようだし、これらの組織に属していない団体も、この数字の2倍以上あると推測される。

### 〈組織の活動について〉

まず全日本合唱連盟のジュニア部門の公の催し物としては、毎年8月の第1土曜・日曜日に行なわれる、全日本ジュニアコーラス・フェスティバルがあげられる。

1986年に、この大会のプレの催しものとして、「少年少女合唱団大集合」と称する、全国規模の大会が神奈川で行なわれた。翌1987年に全日本少年少女合唱祭として第1回を開催、第6回までは、キユーピー株式会社の協賛を得て、おかあさんコーラス全国大会の前日に催された。そのため、会場は、第1回は福岡県で、第2回は北海道で、以後広島、福島、愛媛、東京と、全国各地を回っている。

## 今日の合唱活動—その現状と課題



第7回（1993）から名称を現在の全日本ジュニアコーラス・フェスティバルと改め、協賛に富士電気株式会社の応援を得ることになった。会場は1993年の東京芸術劇場と1997年の鎌倉芸術館を例外として、今まで東京府中の森芸術劇場に固定している。

出演団体は、連盟の各支部から1~4団体ぐらい推薦され、合計20~25団体程度、参加資格は、連盟に加盟していないてもよいことになっているが、学校を拠点とする合唱団は参加できない。

フェスティバルの前日には、指導者のためのセミナー、その他のプログラムが用意されている。また当日は外国からのゲストを含む3人の講師により、演奏へのアドバイスや感想などが、講評として書面で渡されるなど、たのしいばかりでなく、各合唱団の向上心を刺激するよう配慮されているようだ。

さらに、すぐれた演奏をした団体には、あおぞら賞（全体の約3分の1）が、そのほかの団体には、そよかぜ賞が与えられる。

一方、全日本少年少女合唱連盟は、毎年春休みに合唱祭を開催しており、会場は西日本を中心に、各地を回っている。ちなみに、最近の開催地をみてみると、昨年は泉州佐野市で行なわれ、今年は鹿児島市で、さらに来年以降、滋賀、愛媛、広島などが予定されている。

今年の鹿児島大会は第19回め、3月最後の土・日の2日にわたって開催された。ときには同日2会場で行なわれることもある。

合唱祭では、こどもたちの音楽のこころの発露を大切に、だれもがうたえる合唱を一堂に会して楽しむことを主眼としている。また、この合唱祭のために、毎年委嘱作品を用意し、半年前から準備して、合唱祭で参加合唱団が合同で演奏する。ことしで4作めになり、曲がふえたたら、1冊にまとめて出版する計画もあるようだ。

JjCSも毎年3月末に東京で合同演奏会を行なっている。約30団体が参加しており、最後には各合唱団から数名の代表を出して、「ハレルヤ・コーラス」ほかの曲を合同演奏する。各地のこどもたちは、東京でうたえることに喜びを感じているようだ。

さらに、年に1回、指導者研修会を開催する。できるだけ多くの地方を回り、合唱に携わっていない小学校の先生などを対象に、講師を呼び、指導法や曲の解釈などを

モデル合唱団とともに学ぶ。

### 〈問題と課題〉

このように、それぞれの組織が、特徴ある催し物を行なっていることは、それなりに意義あることではあるが、いちばん重要なことは、今こどもたちが実際に何を学び、それがどのような意味をもち、将来にどうつながっていくのか、ということではないだろうか。

そのことを明確に意識している指導者が少ないことが現在の大きな問題点であろう。また児童合唱の指導者は、多くの場合その合唱団だけの指導者であり、



(社) 全日本合唱連盟提供



## 今日の合唱活動—その現状と課題

他のジャンルの合唱団との交流がほとんどないことも、視野が広がってこない大きな要因になっている。反面、児童合唱団以外の指導者たちも、めんどうなことが多そうな子どもたちから目をそむける、あるいは、「子どものことは子どもの指導者におまかせ」といった風潮がある。

もっと双方が歩み寄り、理解し合い、交流を深めることで、児童合唱の世界は、さらに健全に育ち、将来のおおきな展望がのぞめるのではないか。

また、最近の少子化傾向に加えて、合唱などに関心をもてなくなっている世相を反映して全国的にメンバーが減少傾向にあることも、大きな問題だ。こうした状況のなかで、なんとか合唱団を維持しようと精魂を傾けている指導者たちにはこころから敬意を表するのだが、今のところ、ほとんど打つ手はないようだ。

しかし、これらの流れからすこし離れたところで目覚ましい活動を続けているいくつかの合唱団があることもつけ加えておきたい。たとえば50年の歴史を刻み、外来オーケストラとの共演などで高い評価を得ている東京少年少女合唱隊、強力な組織を吸引力に多数の団員と実力を誇る東京放送児童合唱団、現代作品の初演などで、独自の境地にあるひばり児童合唱団などがその代表といえるだろう。

今回は、誌面の関係上、現状を紹介するにとどまり、大きな課題があるにも関わらず、十分に言及できなかったことはざんねんだが、今後の合唱関係者の真摯な取り組みに期待したい。子どもたちの合唱が、大人の思惑や、思い込みなどに左右されではないのだから。

### 民衆文化としての主婦の合唱

主として家庭婦人をメンバーとする合唱団を、一般にはママさんコーラス、あるいはおかあさんコーラスとよび、現在わが国には、数えるのが困難なほど多数の団体があるようだ。この現象は日本特有のものと言われてきたが最近では台湾などでもふえつつあるときいている。

現在、全日本合唱連盟では、県単位の加盟団体数を調査しているが、市町村単位の数は把握していない。神奈川県を例にとると、現在のおかあさんコーラスの加盟は140団体だが、未組織の団体はこの3倍はあるはずだ。

全日本合唱連盟が主催して、毎年夏に行なっているおかあさんコーラス全国大会は、ことし第23回を迎えるのだが、その前に3回のプレ大会が開かれており、実質的には25回めになる。

実際におかあさんコーラスが、このような大会を開くまでに盛んになってきたのはその10年ぐらい前のことであろうし、各地にこうした合唱団が生まれはじめたのは、さらにその10年も前の昭和30年前後のことと想像される。事実、40年以上の歴史を持つ団体もいくつか存在し、なかには50周年を迎えるという合唱団もある。

#### 〈夏の大会とともに歩む〉

さて、このおかあさん合唱団が、実質的には前述した全日本合唱連盟と朝日新聞社主催（協賛・キューピー株式会社）の全日本おかあさんコーラス大会とともに成長してきたことは、まぎれもない事実といってよい。

プレ大会が始まった当初は、北海道や東北からの参加はなく、第1回からやっと9支部の代表がそろい、おかあさんコーラスの時代が本格的に、幕をあけることになる。

とはいっても、地域的にはまだバラつきがあり、会場も東京と関西中心であった。また、家族において、コーラスのために家庭の主婦が泊まりがけで出かけることとか、その



(社)全日本合唱連盟提供

費用はどうするのかなど、問題が多かったようだ。

また、賞をどのように出すかについてもかなり試行錯誤があった。当初から主催者側には、この催しをコンクールの形にはしたくないというはっきりした主張があったのだが、せっかく全国各地から集まってくるのだからなんらかの賞があったほうがよいのではないかという考え方から、数年間は試行錯誤の連続で、さまざまな賞が出ていたが、第5回から現在のかたちに定着した。つまり、全国大会出場の全団体の約3分の1の優秀な演奏に対して、ひまわり賞

を授与する。一時期はそれに加えて最優秀賞としてグランプリが出たこともあるが、過当競争を避けるため、これは中止になった。

こうしておかあさんコーラスは、その後発展に発展を遂げ、年々参加団体が増え続ける。はじめのうちは、連盟に加盟していない団体も参加できることになっていたが、やがて加盟団体のみということになったのも、当然のなりゆきだった。さらに、1993年第16回大会からは、それまでの1日開催から2日開催になった。また会場は、年ごとに変わることになっており、全国各地を回っている。

#### 〈夏の大会の成果〉

この大会がもたらした最大のものは、主婦の合唱団の急激な増加もさることながら、彼女たちのレパートリーの拡大と、演奏形態の豊かさであろう。

大会の主旨として、演奏の内容のみならず、選曲、演出、衣装、さらにステージ・マナーも選考基準となるため、すべての面にわたって主婦たちの創意工夫がこらされ、なかにはプロ顔負けのパフォーマンスを繰り広げる団体もある。こうして、毎年県大会、支部大会を経て、8月の全国大会に集まる団体の熱気と華やかさは、ここで頂点をきわめる。

手作りの衣装あり、ミュージカル仕立ての振り付けあり、演奏される曲目も、民謡、オペラの合唱、イタリア歌曲、グレゴリオ聖歌など、はたまた委嘱作品まで、じつに多彩なレパートリーを誇る。このような特徴をもつこの大会は、まさしく主婦たちの日常生活のなかから産み出された、現代日本の民衆文化のひとつといえよう。

#### 〈その他の流れ〉

一方で、最近はこうした風潮を避け、さらに音楽的に高い境地を求めて、アンサンブルをきわめようとする団体も、わずかずつではあるが増えてきている。

現に、コンクールでも、いくつかは一般の団体と並んで金賞グループに入る主婦の団体もあるし、各地で盛んになっている小グループを対象としたアンサンブル・コンテストでは主婦の団体が上位を占めることもめずらしくなくなった。

このようなグループのメンバーの中には、音楽大学で学んだ者も少なくないようだ。彼女たちは若くして結婚し、子育てを終え、やや遅めの青春を謳歌しているというところか。

いずれにしても、主婦による合唱は、今のところ衰えることを知らない勢いであり、この勢いは、いずれ野火のごとく、シルバー世代にも広がっていくことだろう。こうして、主婦の合唱は、生涯学習の主役の場を確固たるものにしつつある。